

ラインの向こう側

～ 留置所体験記 その2 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

前回のあらすじ

友達2人と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置所生活が始まった。留置所で出会った「まっつぁん」に一日の大体の流れを聞き、留置所生活が10日くらいだと教えてもらう。13日後にあるライブに間に合うかもしれない安心感。「何やってんだよ」と初めて思い、そして初めて母ちゃんの事を考えた。

朝の掃除後、意外とうまい「味噌スープ」から1日が始まった。

捕まった人は捕まった次の日に東京地検に行くんだって。だから僕は次の日だった。朝飯が終わった後に「運動」って時間があるんだ。？ ラジオ体操でもすんのかな？

全然違うでやんの。こいつぁ本当に驚いたよ！ 煙草が吸えたんだ！ だって僕ぁ、仮にも犯罪者な訳でしょ？ 一日2本吸っていいんだってさ。想ってもみなかった事が起きた！ まぁなんてラッキー！ 「暗雲に光がさした!!」、なんて言うちょっと大げさだけど、けっこううれしかった訳さ。捕まった時に煙草もってたら、それを吸えるんだ。一日2本ずつ、もちろん運動の時間にだけね。

ささやかな至福の時を終え檻に戻ると、「3番(あ、これは僕の事ね。留置場番号ってやつ)は、移動」って言われて別檻に移される事になった。つまり、ここでまっつぁんとお別れだ。と言っても同じ留置場内での移動だけだね。まっつぁんに挨拶すると、笑顔で返事してくれた。これぁなんだか心温まるものだったよ。

次なるステージは、まっつぁんと居た檻よりも広い所で、最多で7～8人は収容できるとこだった。その時は3人だったかな？ うん、確か3人だった。その留置場出入口に一番近い檻には3人の人がいた。そしてその中に1人、すごくおっかない人がいたんだ。なんで話した事もないのにそう感じたのかって？ 見た目が！ っていうのももちろんあるけど、ものすごいオーラがでてたんだよ！ 色にするなら、まさしく黒。僕の心臓を突き

刺すかのようなその強烈な視線。逮捕された瞬間、留置場行きが決まった瞬間、それに勝るとも劣らぬ恐怖だった。セカンドステージ、それは恐怖心だらけのスタートだった。

「よろしくお願いします。」必死に恐怖を乗り越えるべく、そこにいる人全員に挨拶。それで自己紹介。もう心臓バクバクだったよ。胸に手つっこんで止めたいくらい速いビートを刻んでた。多分、リンゴ・スターよりも速かったろうな、あれは。

真っ黒 黒。「おう、よろしくな。」すごい人間味のある声だった。闇のような黒は、もうそこにはなかった。僕に黒がにじんだのか、彼がもともとそうじゃなかったのか、もうどうでもいい事だったね。「ゆうじ」って名前だった。もう「怖い人」じゃなかった。「よろしくな」の瞬間から、その人は「ゆうじ」さんだった。おっかなそうな雰囲気をもった人間だった。悪魔じゃなかった。そして、これから出所するまでの間、僕はこの「ゆうじさん」に色々助けてもらう事になる。

セカンドステージのメンバー：

僕、ゆうじさん、連さん、にんにんさん。

つづく・・・